2020 年 10 月 1 日　No.33（1）

HB通信

編集・発行 /
一般社団法人
ひょうご部落解放・人権研究所

〒 650-0003　神戸市中央区山本通 4-22-25 兵庫人権会館 2 階
TEL：078-252-8280　FAX：078-252-8281
e-mail：blrhyg@extra.ocn.ne.jp　URL：http://blrhyg.org/

所長の諏訪山だより

なぜ若者は声を上げないのか

安倍首相が持病の再発を理由に辞意を表明したら、安倍内閣の支持率が前週に比べて 20.9 ポイント上昇し、56.9％になったという（共同通信）。病気で辞めざるを得ないのは、気の毒ではあるが（できれば、総選挙で大敗して辞任してほしかったのだが）、気の毒だという気持ちが支持率の大幅増となってしまう国民の政治意識のありようは、いったい何なのだろうか。それと同時に、若者の安倍内閣支持率の高さにも驚く。今年の 5 月の世論調査（朝日新聞）では、安倍内閣の支持率は 29％であったが、29 歳以下では 39％と、10 ポイントも高いのである。また、7 年 8 か月に及んだ安倍政権の平均支持率は 44％であったが、29 歳以下の男性のそれは 57％なのである。

1997 年以降、日本の実質賃金は低下をつづけ、格差と分断は強まるばかりだ。非正規雇用の増加は止まらず、金融資産を保有していない単身世帯も大幅に増えている。こうした生活の不安定化に対する不満が、なぜ若い人たちから出てこないのであろうか。

各地の自治体が実施している人権意識調査をみると、自己責任論に依拠するような回答が若年層で目立っている。「いじめはいじめを受ける子どもにも問題がある」「 不登校は本人が努力すれば克服できるはずだ 」「 刑を終えて刑務所を出所した人の就職が容易に決まらないのは、やむを得ない 」という意見を肯定する回答は、年齢が若くなるほど多くなるのである。

就労の不安定化や生活水準の低下などは、自分のせいであり、その不満を口にすることは、自分の責任を棚にあげて、社会に不満をぶつけているだけだと、周囲から責められるのではないか。若者たちは、それを恐れているように思える。自己責任論は、社会の問題を個人の問題に容易にすり替えてしまう。これでは、自助を前面に押し出す菅内閣の思う壺である。

自己責任論に依拠する若者からみれば、モリカケ・桜と、安倍政権を批判する野党は、安倍批判にだけ終始する無責任な存在と映るのであろう。そして、実際は少子高齢化による生産年齢人口の大幅減の結果にすぎないのだが、雇用動向の好転をもたらしてくれたかのようにみえる自民党政権のほうがまだマシと思ってしまうのだ。

「近頃の若者は……」と嘆いている場合ではない。こうした憂うべき傾向から、私たちは学校教育におけるこれからの課題と、いまの若者に対する啓発のあり方を見つけ出さなくてはならないのではないか。

所長　石元清英

はじめてみよう！

部落問題学習、考え方・実践のヒント（その2）

当研究所では「これからの部落問題」学習プログラム作成研究会を組織し研究を重ね、2017 年 3 月に解放出版社より『はじめてみよう！これからの部落問題学習』を刊行しました。うれしいことにご好評をいただき、今年８月、２度目の増刷となりました。当欄では『はじめてみよう！』掲載の 16 のコラムを順次掲載し、部落問題の考え方のヒント、学習実践のヒントをご提供していきます。

▶『「寝た子を起こすな」 論とは』／井上浩義（兵庫県立加古川東高等学校教諭（当時））

部落差別の解決方法としてあげられるものには、政策的、経済的取り組みや、人権尊重の意識を高めるための教育・啓発が必要だとする積極的なものもあれば、問題を含むものも少なくありません。

その代表的なものが「部落の人たちが、一定の地域にかたまって生活しないで、分散して住むようにすればいい」という「部落分散論」と、「部落問題のことは口に出さず、そっとしておけば、差別は自然になくなる」「寝た子を起こすな」論です。

もしこの考え方が正しければ、部落問題の解決の方法は、「部落のことは考えない、意識しないようにする」「学校やメディアが部落問題に関する情報を提供しない」ということになります。

この考え方は「部落差別が存在している」ということが前提になるという矛盾をはらんでいます。差別がないのなら、「そっとしておく・意識しないようにする」必要はないからです。

いまなお存在している部落差別を「教えない、知らせない」とは、どういうことでしょうか。簡単にいえば、「事実を隠せ」ということになります。「事実があっても、教えない、知らせない」ということが部落差別をなくす方法である……なんともおかしなことになってしまいます。

一般的に、知識を獲得することは「喜び」であり、ワクワクする経験であるはずです。なのに、部落問題については、知ったら変に意識してしまうから、知らないほうがいい、教えないほうがいいと考えてしまうのはなぜでしょうか。ある人たちを差別し、排除しようとする心理があって、そこに部落問題が入ってくると、差別する側に回ってしまうかもしれない自分に無意識に気づいているのかもしれません。

差別や偏見に対して、抗しうる科学的認識と態度をもち合わせているなら、部落問題が入ってきても、「それはおかしい」と批判できるでしょうし、「変に意識してしまう」こともないはずです。「そっとしておけばなくなる」というなら、たとえば「水平社」もなく、解放運動もなく、同和対策事業も行われず、同和教育も一切なかったら、もっと早く部落差別がなくなっていたということになります。

「寝た子を起こすな」という考え方は、このようにさまざまな矛盾を含みながら、いままで受け継がれ、その結果、部落差別を直視しないことによって、差別をないことにしてしまい、問題が放置されてしまうという状況をつくりだしています。

一見、「部落差別の解決法」という装いをもった「寝た子を起こすな」論や「部落はコワイ」「血筋が違う」などの偏見を打破しうる知識、態度、スキルを獲得するには、どのような内容をどんなふうに教えていくのか、学んでいくのかが問われなければならないはずです。

現実を見ない、語らない、聞きたくないというではなく、いま、私の生きているこの部落問題をめぐる状況にたどり着くまでに、人々のどのような取り組みがあったのか、そして、どうしてまだ部落差別が解消されていないのか、何が課題なのか……。そのような積極的な「問い」をもつことを大切にしたいものです。

まんがのすゝめ

『天上の弦』全10巻

山本おさむ著、2003 年～ 2007 年、1 巻 505 円(税別)、小学館

今年、NHK 広島放送局が「もしも 75 年前に SNS があったら」という設定で、実在の人物の日記をもとに広島への原爆投下を挟んだ日々のことをツイッターで発信した。その中に「朝鮮人だ！！大阪駅で戦勝国となった朝鮮人の群衆が、列車に乗り込んでくる！」「朝鮮人の奴らは『この戦争はすぐに終わるヨ』『日本は負けるヨ』と平気で言い放つ」というような投稿があり、ネットが炎上した。当時のことを体感して欲しいという意図だったようだが、歴史背景の注釈もなく、このまま発信したというのだから驚くしかない。しかも、もとの日記には「奴ら」という記載はない。公共放送である NHK が、何の問題も想定できなかったということに、在日コリアン当事者の肌感覚としては、かつての在特会よりもっと怖いと感じてしまう。加害の歴史に向き合わず、被害の歴史ばかりが強調される。この SNS を担当したのは高校生のグループだというが、在日コリアンの歴史が、学校では今どのように教えられているのだろうか。

本書は、1920 年から 2002 年に至るまでの在日コリアンの歴史をベースに、「東洋のストラディバリ」と呼ばれる世界的なバイオリン製作者、陳昌鉉（チンチャンヒョン／チンショウゲン）の半生を描いた物語である。2003 年から 2006 年に渡り漫画雑誌『ビッグコミック』に連載され、原作となった『海峡を渡るバイオリン』は 2004 年に草彅剛主演でドラマにもなった。

陳昌鉉は 1929 年日本の植民地支配下にあった現在の韓国、慶尚北道金泉市（キョンサンブクドキムチョンシ）で生まれた。地主の子ではあったが、父は大酒飲みで働かない。土地や田んぼを切り売りしての生活は、決して豊かなものではなかった。尋常小学校に入ると朝鮮語を使うことは禁止され、日本人の校長は入学したばかりの子どもに修身の教科書を読み上げる。態度が悪いと、容赦なく暴力をふるう。それでも子どもたちは朝鮮と日本の間を行き来しながら、たくましく生きていた。

昌鉉が 4 年生のとき、家に相川という日本人の先生が下宿することになる。相川先生は他の日本人の先生たちのように威張ったり、殴ったりすることなく、まるで血の繋がった兄弟のように子どもたちに接した。そんな相川先生との出会いと、彼が日本から持ってきたバイオリンが、のちに昌鉉の人生を大きく導くようになっていく。

「相川先生のような先生になりたい」と日本で学ぶことを決心した昌鉉は、わずか 14 歳で単身日本に渡り、輪タクの運転手や肉体労働をしながら大学まで卒業するが、卒業間際、朝鮮人は教員になれないという現実を突きつけられる。日本の敗戦で混乱する状況の中、地を這うように生きながら出会ったのは、自分の手でバイオリンを作りあげたいという希望だった。すべて独学でバイオリンを作りあげた昌鉉は、1974 年、アメリカで開催された第２回アメリカ国際バイオリン・ビオラ・チェロ製作者コンクールで、６部門中５部門での金メダル受賞を果たす。

それにしても、作者の山本おさむの表現力、ストーリー構成はすごい。原作があるにせよ、植民地支配下の朝鮮に暮らす人々、多くの農民が田畑を失うことになった土地調査事業、創氏改名、８月 15 日の解放、朝鮮戦争の混乱、北朝鮮への帰還事業などなど、在日コリアンが生きてきた来し方がこの 10 巻に凝縮されている。山本の意識の中には、そこを軸にして伝えなければならないという使命感のようなものがあったのではないか。

冒頭のツイッターを読んだ若者たち（だけとは限らず）に、「朝鮮人」の背景に何があったのか、是非とも読んでいただきたい。（K）

人権啓発研究第 41 回兵庫県集会

○日時：**2020 年 11 月 28 日（土）13 時～ 16 時 20 分**
○開催形式：オンライン配信、県内隣保館（サテライト会場）等での参加
○参加費：無料　※報告書はお申し込みが必要です（900 円 + 税 + 送料）
○申込受付：2020 年 10 月 1 日（木）～ 11 月 18 日（水）
○集会内容：**シンポジウム「新型コロナウィルスによる差別について考える」**

■パネリスト
安田菜津紀さん（フォトジャーナリスト）
小林丈広さん（同志社大学教員）
中部剛さん（神戸新聞報道部次長）
■コーディネーター
宮前千雅子さん（関西大学人権問題研究室委嘱研究員）

アカウント登録はこちら

○申し込み方法
▶オンライン配信：ひょうご部落解放・人権研究所ホームページのトップページ（http://blrhyg.org/）にある「アカウント登録はこちら」のボタンをクリックするか、上記 QR コードを読み込んでアカウント登録をお願いします。
▶サテライト会場：電話または FAX でひょうご部落解放・人権研究所へお申し込みください。詳しくは研究所 HP の研究集会のページをご覧ください。
○申し込み締め切り：2020 年 11 月 18 日（水）
○お問合せ：**人権啓発研究第 41 回兵庫県集会事務局（ひょうご部落解放・人権研究所）**
電話：078-252-8280　FAX：078-252-8281　e-mail:blrhyg@extra.ocn.ne.jp

2020 年度人権セミナー
第２回「いま、部落問題を語る――新たな出会いを求めて」
○日時：**10 月 3 日（土）14：00 ～ 16：00**
○講師：山本栄子さん（『歩――識字を求め、部落差別と闘い続ける』著者）
山本崇記さん（静岡大学人文社会科学部教員）
○場所：のじぎく会館 201 号室（定員 60 人）
※定員に達した場合、入場をお断りすることがあります。

事務局から

● 人間ならば 100 歳超の愛猫は、ここ数年、季節を経るごとに衰え、ついに命が尽きようとしている。コロナ禍のため一緒にいる時間を多くとれたのは、幸運というべきか。（ka）
● 今年の県研はオンライン開催。初めてのことで事務局はあたふたしているが、より多くの方々に参加していただける機会にと、願ってやまない。（K）
● 丹南町の山の中にある１棟貸しの農家民宿に宿泊。ネットもつながりにくくて、テレビもない場所で、家族で密になって楽しい時間を過ごしました♪（ひ）
● 現在、研究所の中長期的なビジョンについて議論が始まっている。様々な課題があるなか、知恵とスキルとネットワークなどを総動員しながら、変わり続けることが肝要かなと。皆様のお知恵・ご支援をいただければ有難いです（H）